

博物館における合理的配慮とは？

— 千葉盲学校との連携を例に —

千葉県立中央博物館 研究員 丸山 啓志

1. はじめに

2022年8月、プラハ大会で採決された博物館の新たな定義は次のとおりである。

“博物館は、有形及び無形の遺産を研究、収集、保存、解釈、展示する、社会のための非営利の常設機関である。博物館は一般に公開され、誰もが利用でき、包摂的であって、多様性と持続可能性を育む。倫理的かつ専門性をもってコミュニケーションを図り、コミュニティの参加とともに博物館は活動し、教育、楽しみ、省察と知識共有のための様々な経験を提供する。”

この中で、「博物館は一般に公開され、誰もが利用でき、包摂的であって、多様性と持続可能性を育む。」ということで、ダイバーシティ&インクルージョンについても取り上げられている。世界的な動向として、多様な背景（障害や特性など）を持った方を含めて、博物館が誰でも楽しむ施設である必要性が高まっている。

本発表では、『BIOCITY ビオシティ 97号 自然史博物館が拓く新時代 自然と人をつなぐために』（図1）の中の拙稿「自然史博物館における“合理的配慮”とは？—盲学校との連携を例に—」を基に再構成、加筆したものを紹介する。



図1：『BIOCITY
ビオシティ 97号』書影

2. 来館を難しくする要因

日本国内の動向として、「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」（障害者差別解消法）が制定され、2024年4月には改正法が完全施行された。今後、博物館においても、当事者や関係者から合理的配慮を求められる場面が増え、またこれまで以上に期待される機会もと考えられる。

実際に、現在、様々な障壁によって来館が難しい人が多いのも事実である。その要因として、心身障害などによる身体的・感覚的・知覚的要因や、博物館の分布などによる地域的要因、来

館までのコスト（入館料や交通費）のような経済的要因などがあげられる。このような要因に対して、博物館側も、ソフトとハードの両面を含む様々な手法でアプローチし、合理的配慮について検討している。本発表では私が関わった実践例を紹介する。

3. 千葉県立中央博物館と千葉県立千葉盲学校との連携

実践例の前に、当館（千葉県立中央博物館）と千葉県立千葉盲学校との連携について、紹介する。

まず、東（2020）に基づいて「博物館学習」の概要を紹介する。博物館学習とは、盲学校小学部の児童を対象に、中央博物館の研究員（学芸員）が、専門のテーマに基づいて講座を行うものである。1993年からはじまり、継続して30年にもなる。この博物館学習の目的として、千葉盲学校は、①「身近な自然に対して興味関心を持ち、理解を深めることができる」、②「卒業後も博物館をはじめ、様々な教育施設を利用しようという意欲につなげることができる」を挙げている。

また、盲学校中高等部の生徒も博物館見学を行っている。こちらは、博物館について理解するとともに、自主的に見学することを目的としている。こちらでも、研究員（学芸員）による講座を行うこともある。

4. 盲学校との連携における実践例

1) 小学部の「博物館学習」について

初めに、2021年に実施した博物館学習について紹介する。このとき、同じメンバーの児童6名で2回、それぞれ70分の講座をすることとなった。私の専門である古脊椎動物を題材として、1回目は骨を、2回目は化石をテーマに行った。テーマや講座内容を考える上で、盲学校の教員とやりとりをしながら、小学校の学習指導要領とも関連するように詰めていった。また、その際に、受講する児童の人数やサポートする教員の人数、各児童の目が不自由な度合いについても情報提供いただいた。

1回目は、「比べてみよう、ヒトとどうぶつの骨」というテーマで行った。授業で伝えたいことは、①「ヒトとどうぶつによる、頭の骨の共通点（目や鼻の穴の数）と違う点（目や鼻の穴の位置）」、②「どうやって筋肉でからだは動くのか」の2つにした。この際、教材として、ブタの頭骨、コヨーテの頭骨、イヌ全身骨格模型、ネコ全身骨格模型、ブタ解剖モデルなど、触れる標本や資料を用いた。

授業の流れは、次のとおりである。

- 1) 自己紹介：私自身の専門や研究などについて紹介し、緊張を和らげるようにした。

- 2) 導入：骨について、クイズを交えながら、受講児童が持つ骨のイメージや経験などの確認を行い、アイスブレイクを行った。また、これから行う骨についての全体的な話も行った。
- 3) ヒトと動物の頭骨の比較：ブタとコヨーテの頭骨と自身の頭骨を触りながら比較した（図2、図3）。その際に、目と鼻の位置の違いについて気づくようにした。実施に当たっては、標本の取り扱い方として、そっと触ることや、落とさないようにすることといった注意喚起を行った。また、触覚で目の位置を考えられるように、ティッシュを用いて、仮の眼球を作ることで、位置の把握がしやすくするように工夫を行った。
- 4) ヒトと動物の体の骨の比較：まずは、受講児童が触ったり、体を動かしたりすることで、骨格について体感してもらった。骨と筋肉や関節の関係について考えられるように、各自で力こぶをつくらせ、上腕骨と上腕二頭筋の関係について感じてもらった。そして、イヌ全身骨格模型やネコ全身骨格模型、ブタ解剖モデルなどに触れることで、他の動物との比較を行った。また、手首の近くの骨（尺骨・橈骨）などについて体感してもらい、他の哺乳類と四肢を比較することで、専門用語は使用しないものの、相同器官について考えてもらった。動物の種ごとに異なる四肢の利用について考えてもらうことで、共通点と違う点についての理解を深めるようにした。
- 5) まとめ・質疑応答：質問については、時間の制約もあったので、全てに答えるのではなく、後日、当方から盲学校の教員を通じて行うという形を行った。



図2：ブタ頭骨を参加人数分準備中
(料理用のブタ頭部を腐らせ、
除肉し、漂白乾燥中)



図3：ブタ頭骨とコヨーテ頭骨を用いて
感覚器官（目や鼻の位置）を確認
* 目については表現に注意

2回目は、「化石にさわってみよう！」というテーマで行った。授業で伝えたいことは、①「化石とは何か、触感を基に実感してもらう」、②「千葉県でも見つかった化石について」の2つとした。この際、生命と大地の歴史を体感する化石キットや、展示室の剥ぎ取り標本など触れる標本や資料を用いた。

授業の流れとしては、次のとおりである。

- 1) 導入：簡単に自己紹介をし、クイズを交えながら、前回の骨の授業の簡単な復習を行った。
- 2) 地層の話：展示室で、地層の剥ぎ取り標本を前に、地層の簡単な説明を行った。また、剥ぎ取り標本に触れることで、地層のイメージを持ちやすくするようにした。

- 3) 児童の持つ化石のイメージ共有：化石について問いかけを行った上で化石キットを用い、虫入りコハクに触ることで、化石のイメージや定義、種類への理解を深める容易にした。
- 4) 千葉県で見つかる化石や身近な化石の紹介：実際に千葉県で見つかった化石を触ってもらうとともに、エゾタマキガイやトウキョウホタテといった海棲動物の化石が見つかることから、千葉県が大昔海であったこともイメージしてもらうようにした。
- 5) 様々な化石の紹介：新しい時代から古い時代まで、様々な化石に触れることで、古生物に関心を持ってもらえるようにした。ここでは、ティラノサウルスなどの恐竜化石のレプリカや、アンモナイトや三葉虫など、受講児童が名前を聞いたことのあるような化石に触れもらい、イメージを持ってもらうようにした。
- 6) まとめ・質疑応答：1回目同様、質問については、後日回答を行った。



図4：様々なハンズ・オン化石標本触察（触って学ぶ）や、弱視の方は視覚も活用



図5：大型の化石にも触れるタブレットなどの補助具を使用、触察も実践

2) 中高等部の博物館見学

2023年、略案に準ずるものを作成し、中高等部の博物館見学が行われた（表1）。

表1. プログラム略案（部分）（プログラムの展開）

時配	学習内容と活動	指導及び支援上の留意点 ◎視覚障害に配慮した留意事項
0 (30)	① 博物館の自由見学 生徒が、自由に展示室を見学する	・他の来館者へ配慮する ◎音声ガイドなど、サポートツールについて事前に紹介しておく
30 (10)	② 地学展示室で導入 ・化石について…化石とは ・地層について…化石の由来 <移動・休憩>	◎化石や剥ぎ取り標本に触れることで実感させる
40 (15)	③ 研修室で本論 ・地球史の時代区分・チバニアン期の紹介（5分） ・チバニアン期と現在の生き物の比較意見交換（20分）	・他の古生物（恐竜やアンモナイト）を用いて、生命の歴史への導入を行う。 ・千葉にちなんだチバニアン期について紹介する ◎化石と現在の生物の骨を触らせて比較を行う。 クジラの肋骨 シカの角 クジラの耳骨
55 (55)	・チバニアン期の生物の大きさ比べ（15分） ・まとめ（10分）	◎チバニアン期の古生物について、実物大復元画をもとに、その大きさを歩いてもらうことで、サイズを実感してもらう ヤベオオツノジカ ステラーカイギュウ ゾウのなかま オオキトド ・この単元のまとめを行う。

この際、題材設定理由は、博物館という施設について理解を深めるためとした。今回の見学の見学目標として、チバニアン期の化石などの実物やレプリカに触れ、博物館についての理解を深めることとした。

ここで、小学部との大きな違いとして、房総の地学展示室という展示室を活用する点が挙げられる。その中での合理的配慮として、目が不自由な生徒の理解が深まるように、地層の剥ぎ取り標本など普段は触ることができない展示物も特別に触れるように配慮した（図6）。



図6：大型の地層の剥ぎ取り標本
通常は触ることのできない展示物
触ることで地層の縞模様を体感

この中高等部の博物館見学について、この他に、特に留意した体性感覚についての実践については、ポスター発表「目の不自由な方が博物館を楽しむためには？—体性感覚からのアプローチ—」で紹介する。

5. 盲学校との連携での気づき

ここまで紹介した実践例を基に、私が気づいたことや心がけていることについてまとめていきたいと思う。

1) 相手の背景についてできる限り知ること

今回の実践に限った話ではないが、事前にやりとりが可能なのであれば、相手が不快にならない範囲で背景について知っておく必要がある。こちらが合理的配慮を検討する際に、相手のことを知らなければ、情報保障をはじめとして、応対について検討することが難しくなるからである。今回の実践においても、盲学校から事前に目の不自由な度合いについて情報提供をいただいている。目が不自由な方といっても、全盲かそうでないか、視野が狭いのか、中途失明か否かなどいろいろと状況が異なり、それぞれに応じた対応を考える必要があったからである。合理的配慮を考える上で、こうした事前のやりとりは極めて重要であると考えられる。

2) 五感や身体感覚に訴え、モノの魅力を活かすようにすること

博物館の強みとして、標本や資料などのモノを取り扱うことが挙げられる。このようなモノの魅力を効果的に伝えることが重要である。この際、先の背景を知っておくことにもつながるが、個々の障害特性を把握しておくことが重要である。障害特性がわかると、他の五感や身体感覚に訴えることが可能である。例えば、目が不自由な方は、聴覚や触覚などの感覚が敏感になる傾向がある。そのため、モノがあれば、視覚以外の感覚も使って、対象に対するイメージを膨らますことが可能となるのである。

3) 可能な範囲で、対象に歩み寄ろうとすること

私たちは、身近に障害特性を有している方がいないと、なかなか実態をイメージすることは難しい。また、精神障害や発達障害など障害特性が可視化されにくい方もいる。そのような中で、可能な範囲で、機会を見つけ、関わろうとすることが重要である。

私自身、大学院生時代、目が不自由な方の博物館体験の手伝いや、特別支援学校への出前講座の手伝いを行ってきた。また、教員免許の取得や同行援護従事者の資格取得を通じて、障害がある方との関わり方について学ぶように心がけてきた。

なかなかハード面からのアプローチが難しい場合でも、心もちなどのソフト面からアプローチすることは、可能な範囲であれば、すぐに行動に移すことができると思う。

4) 博物館を楽しんでもらうこと

ここまで述べてきたような工夫を通じて成し遂げたいことは、博物館を楽しんでもらうということである。研究員（学芸員）は、各専門分野に基づいて、様々なコトを知ってもらうように努力する。この際に、研究員自身が楽しみ、参加者も楽しんでもらうことで、博物館が楽しい場所であったと記憶に残るようにしてもらう工夫をする必要がある。もっといえば、知的に楽しいと思ってもらえるように工夫ができればと思う。博物館が楽しい場所と思ってもらえれば、個人でも団体でも次の来館のきっかけになるからである。

6. まとめにかえて

今後、博物館を含め、社会全体として、様々な場面で合理的配慮について考える場面が出てくると想定される。それにあたって、ハード面について検討していく必要もあるが、一人一人が対応可能なソフト面での対応が重要となってくる。そのためには、お互いのことを知ろうとする、ある種博物館らしい態度が必要になってくるのではないだろうか。

参考文献

東（2020）「県立千葉盲学校における県立中央博物館との連携授業—博物館学習を通しての事例報告—」千葉県博物館協会紀要『MUSEUM ちば』46, 2-8. 千葉県博物館協会.

丸山（2024）「自然史博物館における“合理的配慮”とは？—盲学校との連携を例に—」『BIOCITY』97, 38-43. 株式会社ブックエンド.

謝辞

本発表の内容は、科研費（C）「来館の難しい人が博物館を楽しむための、チバニアンを用いた地域教育プログラム開発」の助成を受けた。

また、本発表にあたっては、塚本明日香 准教授（岐阜大学地域協学センター）、高橋一真 研究員（千葉県立中央博物館）にお世話になった。